

今日の説教のポイント <使徒言行録 19 章 21～40 節>

①「神の必然」 — 独得な信仰的考え方

パウロが初めて「ローマに行こう」と思ったことが記されています。「パウロは～『私はそこへ行った後、ローマも見なくてはならない』と言った」(21)。ここの「見なくてはならない(must see)」ですが、「神様がそうするように思われているから私はローマに行かなければならない」とパウロが考えていることを表す、聖書によく出て来る「神のマス(must)」と呼ばれる表現です。また、原文にあるのに私たちの聖書には訳されていない言葉があります、「**聖霊によって**」です。ローマに行くことはパウロが勝手に考えついたのではなく神様から出たことなのだ、そう聖書は語りかけているのです。

私たちも同じです。なにも天から声が聞こえなくてもいい。神様を信じ、聖書に聞いて生き、「こんな時どうすべきか、聖書はなんと言っているか」、そう考えて生きる時、私たちはもう決して一人ではなく、神様に導かれ、神様と共に生きているのです！

②ローマ行きを決断した途端に巻き込まれた苦難の意味は？

この「神の必然」でローマ行きを決断した直後に、とんでもないエフェソの騒動が起こります。後に「エフェソで野獣と戦った」(コリント一 15:32) とパウロが語っている苦難です。この苦難の顛末を記した 23 節から 40 節に福音的内容を聞き取ることは難しく、ただただ人間の欲望、悪意による曲解、扇動、付和雷同(定見がなく、軽々しく他人の節に従うこと)、集団暴行といったものによってパウロが苦難に巻き込まれたことが記されているだけに思えます。「神の必然」の後に？ ここからどんな福音的内容を読み取れるのでしょうか？

それは、パウロにもこういうことがあったのだという事実そのものにあると思います。私たちも、神様に聞いて生きていると思っているのに、そうは思えなくなるような事態に巻き込まれることがあります。その時にここを思い出せばいい！ パウロは色んな人に止められ(30, 31)、この世の法が異邦人書記官によって正しく用いられ(35 以下)、九死に一生を得たのです！ 私たちにも同じようなことが起こっても不思議ではないのです。しかし、「神の必然」は成るのです！